０８	愛知	長久手市立長久手中学校	トクシマ　　クミコ 徳　島　久　美　子

分科会番号	０７	分科会名	美術教育

研究題目

たくさん考え、たくさんやってみる生徒の育成
～自由な発想を広げる授業と環境づくりの実践を通して～

研究要項

１　はじめに

近年、知識基盤社会の到来やグローバル化の進展による急速な社会の変化に伴い、今後の社会を担う子どもたちに「思考力」や「創造力」を育ませる教育が求められている。中学校学習指導要領「美術」の目標では「心豊かな生活を創造していく意欲と態度を育てる」「豊かに発想し構想する能力や形や色彩などによる表現の技能を身に付け、意図に応じて創意工夫し美しく表現する能力を育てる」と示され、美術という教科は、「どのようなテーマをもって作品を作るのか」「作品にどのような意味や思いを込めるのか」といった、作品の主題を考えることが大切である。

年度当初、３年生 204 名の生徒の様子を観察すると「上手に描くこと・作ること」への意識が強く、主題を明確にしないまま制作を始めてしまう者が少なくないと感じた。また、自分を表現することに苦手意識をもち、たとえ表現したいことがあったとしても、失敗を恐れ途中で構想を変更してしまう様子も見られた。そこで、本研究では「自分が感じたことや表現したいこと」を大切にし、たくさん考え、考えたことを表現するための方法をたくさん試しながら作品制作に取り組むことができる生徒の育成を目指すこととした。

２　研究の概要

(1) 目指す生徒像

自分が感じたことや表現したいことを大切にし、自分の発想や表現に自信をもち、自由な発想を広げ、たくさん考え、考えたことを表現するための方法をたくさん試しながら作品制作に取り組むことができる生徒。

(2) 研究の仮説

①　仮説Ⅰ

自分の作品の主題を明確にする機会や「やってみたい」と思うことを自由に試すことができる環境があれば、「自分が感じたことや表現したいこと」を大切にし、たくさ

ん考え、考えたことを表現するための方法をたくさん試しながら作品制作に取り組むことができるだろう。

② 仮説Ⅱ

作品鑑賞や互いの考えを交換する活動を通して、互いの考えや表現の違いのよさに気付き、認め合うことができれば、生徒は考えることや表現することに自信が付き、安心して自由な発想を広げ、考えたことを表現するための方法をたくさん試しながら作品制作に取り組むことができるだろう。

(3) 研究の手立て

① 手立てⅠ－ア

発想を広げ構想を練る段階で、「自分はどのような意味や思いを込めて作品を制作したいのか」をじっくり考え、主題を明確にする場を設定する。また、作品への思いが込められた作品を鑑賞させ、作品に思いを込め、主題を明らかにして制作することの大切さに気付かせる。

② 手立てⅠ－イ

生徒が構想を練ったり表現方法を考えたりする活動の中で、生徒が「やってみたい」と思うことを自由に試すことができる研究コーナーを、教室に設置する。研究コーナーには、制作に役立つような用具を幅広くそろえる。

③ 手立てⅡ－ア

作品鑑賞や互いの意見を交換する活動を設定し、周囲と考えを共有したり深めたりする機会をつくる。お互いの意見を交換するためには級友とコミュニケーションをとることが必要不可欠であるため、級友と話す機会を多く設定し、他者と意見を交わすことで自分の発想や表現に自信をもたせる。また、話す側と聞く側それぞれの立場の望ましい姿勢を意識する工夫を指導し、話し合い活動が円滑に行えるようにする。

④ 手立てⅡ－イ

作品の構想を練り終えた場面で、アイデアスケッチをプレ作品として「中間鑑賞会」を実施する。表現方法の違いに注目して鑑賞し、気付いたよさを互いに伝え、認め合う機会を設定し、作品をさらによくするためのアドバイスをし合うこととする。自分の視点から他者の作品について考えることで「自分だったらどのように構想を練るだろう」「自分だったらどのように制作を進めるだろう」と思いを巡らせることができるよう意識を向けさせる。

(4) 指導計画

月	研究に関わる単元	主な活動
5	絵画「空想の世界へようこそ」	・ 研究コーナーの設置
7		・ 空想画の下絵を用いた中間鑑賞会の実施
9	鑑賞「ゲルニカ」第１時	・ 作者の意図や思いが込められた作品の鑑賞 ・ 個人による作品との対話
10	鑑賞「ゲルニカ」第２時	・ 個人の作品の解釈を基にしたグループ活動 ・ 話し合った内容を全体へ向けて発表

３　研究の実際と考察（実践と検証）

(1) 研究コーナーの設置の実践（仮説Ｉに対する手立てＩ－イ）

【資料１　研究コーナーの様子】

自分が表現したいことを明確にするためには、発想や構想を実際に試す環境が必要である。そこで、生徒が「やってみたい」と思うことを自由に試すことができる研究コーナーを美術室に設置した。研究コーナーに置いてある用具はいつでも自由に使用してよいこととした。ポスターカラーを使った制作では、グラデーションやスパッタリング、ドリッピングなどの技法があることを紹介した。しかし、初めから本制作で実践してみるのは生徒も抵抗があると考え、まずは研究コーナーについて説明し、たくさん試した上で表現方法を検討、決定するように指導した。生徒たちは研究コーナーにある試し紙（小さい短冊状の画用紙で、雑紙を再利用したもの）や用具を持って、それぞれが挑戦しようと考えた表現方法を試した（資料１）。

生徒たちは「グラデーションは思っていたより難しいな。でも何回か練習したらできそう」「スパッタリングは、歯ブラシに含ませる絵の具の量によって雰囲気が違って見えるな。もう少し絵の具に水を足してやってみようかな」など、実際に試して得た気付きを基に、自分が挑戦しようと考えた表現を追究していた。また、級友が試す様子を見て「グラデーション上手いね！どうやったのか教えて」「その表現はどの道具を使ったらいいの」と質問する生徒が見られた。質問された生徒は絵の具や水の量、用具の使い方の工夫について級友に伝え、互いに学び合う様子が見られた。本制作に入ってから研究コーナーで試

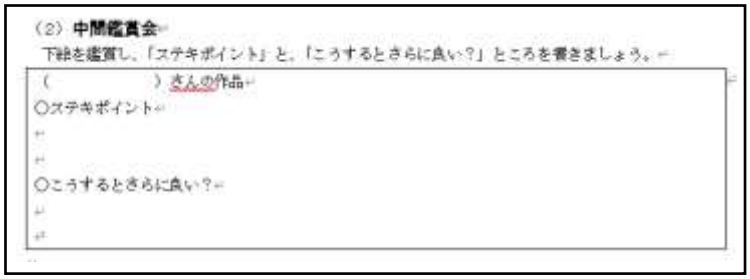
した方法を取り入れる生徒も見られ、さまざまな表現方法を知ることで、自分がイメージする構想をさらに明確にする一助になったと考えられる。生徒は「いろいろな技法があることを知った。特にスパッタリングが好きなので、作品に使えたら使いたい」と今後の制作への方向性を固め、前向きな気持ちをもつ様子が多く見られた。

(2) 絵画「空想画」での中間鑑賞会の実施（仮説Ⅱに対する手立てⅡ－イ）

空想画の授業で、アイデアスケッチを用いて中間鑑賞会を行った（資料２）。今回は「自分のアイデアに悩んでアドバイスを求める人がいたら、自分だったらどのように表現するか、感じたことをふまえて伝えましょう」と指示を出し、鑑賞させた。

【資料２　中間鑑賞会の様子】

【資料３　ワークシート】


(2) 中間鑑賞会
下絵を鑑賞し、「ステキポイント」と、「こうするとさらに良い？」ところを書きましょう。
（　　）さんの作品
○ステキポイント
○こうするとさらに良い？

なお、ワークシートには「こうするとさらに良い？」という項目を用意した（資料３）。多くの生徒が自分の制作における工夫点や悩みをテーマに、級友と積極的に交流することができた。ある生徒は、級友が描いたモチーフについて「卵人（卵で構成された架空の人間）はかわいいけど、文字で説明するんじゃなくて、絵で卵人だと分かるようにした方がいいんじゃない？色ももっと薄い方が卵っぽくなるんじゃない？」とアドバイスをすることができた。アドバイスをもらった級友も、中間鑑賞会を終えてから卵の表現について生徒のアドバイスを基に資料を見ながら再度構成を練る姿が見られた。

(3) 鑑賞「ゲルニカ」第１時の実践（仮説Ⅰに対する手立てⅠ－ア）

自分の作品の主題を明確にするためには、作品にどんな思いを込めるか考える必要がある。そこで、主題を明確にして制作することの大切さに気付かせるために、ピカソの「ゲルニカ」を鑑賞させた。事前に行ったアンケートの結果、ピカソが残した作品や表現力の高さ、多彩さについて理解している生徒は少ないことが分かった。そこで、ピカソやゲルニカについての学習を通して、作者がテーマや思いをもって作品を制作する姿勢の大切さについて考えさせ、より深く考えながら取り組むことができる力を育ませたいと考えた。

【資料４　提示した作品】

第１時では、ピカソの生涯や作品について学習した。導入として作品を何枚か表示し、「それぞれ誰が作った作品でしょう」と問いかけた（資料４）。生徒たちは自身の感想を交えて自由に話し合った後、作品の作者がすべてピカソであることを知り、驚いた様子

であった。その後生徒はピカソが幼少期から絵を描く才能を発揮していたことや、「青の時代」「キュビスム」など、生涯にわたって表現方法を変え続けながらさまざまな作品を生み出したこと、絵画だけでなく彫刻、陶器など多様な作品を制作していたことを学習し、ピカソについての理解を深めた。

その後、「ゲルニカ」の鑑賞を行った。作品を広い視点から狭い視点にどんどん切り替えて鑑賞し、「第一印象を考える」→「描かれているものを探す」→「描かれているものの状態や様子を観察する」→『ピカソが「ゲルニカ」に込めた意図や思いを考える』という流れで進めた（資料５）。生徒たちは、「怖い」「何が描かれているのかよく分からない」「生き物の体の構造がおかしい」「モノクロで描かれているのが気になる」など、それぞれが自分の第一印象をもつことができた。次に「ゲルニカ」に描かれているモチーフを探し、それらの様子や状態について考えた。生徒たちはワークシートに「人間、牛、馬はみんな口を開けているので、何か叫んでいるのではないか」「馬は目を見開いている」「黒目が描かれている人もいれば、描かれていない人もいる。白目の人は、もう死んでしまった人かもしれない」などと書いており、それぞれのモチーフの細部まで見ることができた。また、電球や花、折れた剣など生き物以外のモチーフにも注目して作品をより深く鑑賞することができた。最後の『「ゲルニカ」にはピカソのどんな思いが込められていると思いますか』という問いに対し、生徒たちは描かれているモチーフやその様子、状態を基にピカソの思いを感じとり時代背景もふまえて発表することができた。その際、ピカソが残した「牡牛は牡牛、馬は馬だ。鑑賞者は結局、見たいように見ればいいのだ」という言葉を紹介し、描かれているものにはさまざまな解釈があるため、それぞれが根拠をもって自分なりの解釈を作り出すことが大切だと強調した。生徒は「背景が白いところは生き残っている人で黒いところは死に近い人を表していると思う。ピカソは、生と死はとなり同士であることを私たちに知らせようとしたのではないか」という自分なりの解釈をもつことができた。

【資料５　「ゲルニカ」授業プリント】

(4) 鑑賞「ゲルニカ」第２時の実践（仮説Ⅱに対する手立てⅡ－ア）

第２時では、第１時で考えた個人の解釈を基に班で話し合い活動を行い、各班から出た解釈を発表させた。活動を始める前に、話す側と聞く側の望ましい姿勢について全体指導を行った。全体指導を活動の度に繰り返すことで、生徒たちにも話す側や聞く側の望

ましい姿勢が身に付いてきた。第１時で自分の解釈をしっかりともつことができていたので、話し合い活動にもスムーズに参加することができた。最初はどの班も個人の解釈を順番に発表していたが、「動物は全員左を向いているから、左側に何かあるんじゃない？」「希望とか？明るいイメージ。」「戦争から逃げているんだと思う。」「左側が明るい感じがしないから、絶望へ向かっている様子を表しているんじゃない？」など、それぞれの解釈を合わせたり、話し合いの中で新たな考えを生み出したりするようになった。また、話し合い活動や発表で使用したゲルニカの拡大シートを廊下に掲示することで、自分や班、クラスの解釈を見比べながら級友同士で話し合う姿が見られ、学年全体で鑑賞活動の内容を共有することができた（資料６）。

【資料６　廊下掲示の様子】

４　研究の成果と今後の課題

本研究の事後に行ったアンケートでは「表現の構想を十分に練って取り組むことができたか」という問いに対して「できた」「少しできた」と答えた生徒は、65％から 100％となった。また、「中間鑑賞会では、級友の表現の構想のよいところを伝えることができたか」という問いに対して「できた」「少しできた」と答えた生徒は、70％から 97％となった。生徒からは「研究コーナーでいろいろな表現を試すことができて良かった」「中間鑑賞会でアドバイスをもらって、その後の制作がスムーズに進んだ」「今まで鑑賞の授業で作品について深く考えたことがなかった。自分の作品もちゃんと考えて作りたい」といった意見が多く出された。このことから、生徒たちは作品に対して自分なりに意図や思いを込め、表現方法をいろいろと試しながら制作をしたり、級友の発想や構想、表現のよさに注目して鑑賞活動を行ったりすることができたと考えられる。

今後の課題としては、生徒が知識や技法を身に付け、作品がより表現力豊かなものとなるような指導方法を考えて教材研究を重ねていかなければならないと感じた。アンケートでは「美術の授業で困っていること、悩んでいること」という問いに対して「自分の思ったように作品を作れない」と回答した生徒は、120 名であった。せっかく自由に発想をふくらませて制作しても、それが思ったように表現できなければ、生徒は自信を失ってしまう。今後は、自分の発想や構想に自信をもち、それを実際に形にできるような技能を身に付け、生徒の「できた」が増えるような授業づくりに励みたい。

【参考文献】

(1)　文部科学省『中学校学習指導要領』
(2)　文部科学省『中学校学習指導要領解説　美術編』